

岩田 正美 著

『私たちの社会福祉は可能か
: 社会福祉をイチから考え直してみる』

(有斐閣、2024 年 12 月、332 頁)

岩田 正美



表題の著書は、主に 2000 年以降の日本の社会福祉政策や援助の動向を、世界的な福祉国家の変容を前提に、批判的に論じたものである。社会福祉というシステムは、自覚しようとしまいと、あらゆる人びとを強制的にその中に組み込んで、その生活保障を企ててきたが、昨今のそれは次第に逆機能を帯びてきた。これを転換していくためには、システムに組み込まれた人びと自身が社会福祉のありようをイチから考え、それを「下から」展望していくしかない。タイトルの「私たちの社会福祉」とはこのことを意味している。本書は、特にジェンダーの観点を強調していないが、より問題を抱えながら、援助者としても動員されがちな女性こそ、「私たちの社会福祉」を考えていくべきと思う。ぜひ手に取っていただきたい。

社会福祉は、「正義」「平等」「人権」の実現のように信じられているかもしれないが、資本主義を否定するものではなく、その暴走をなんとかコントロールしようと修正してきたものなので、資本主義社会の基本的「価値」を排除できないという矛盾がある。このことは 1980 年代頃からの、いわゆる福祉国家の危機の下でより明確になり、国家の役割の後退や、労働自立への援助が重点化されていった。日本でも、国民皆保険・皆年金体制の確立の後、介護保険が導入されるが、次第に「自助・共助・公助」という語呂の良いスローガンが流布され、「自助」が第一、次いで社会保険の「共助」、そして狭義の社会福祉（サービスや生活保護）は「公助」というような整理がなされ、社会福祉の拡大にブレーキが掛けられるようになった。また（狭義の）社会福祉という言葉も地域福祉に置き換えられ、その地域福祉は、地域創生事業に絡め取られるような方向で「地域おこし」的方向が強くなっていく。同時に、ニーズ充足の具体的資源よりも「関係の構築」や「寄り添う」支援、また相談事業が重視され、NPO などの活躍が鼓舞された。多くの女性はそれらに動員されている。これらは、一見、地域分権や民間の活力を重視し、利用者の個別ニーズに沿っているように見えるが、国が「上から下へ」押し付けるためのレトリックでしかない。つまり、国家の後退と言いながら、国家がそのような方向を主導し、人びとをボランティアに動員してきているのである。

本書では、このような、国によって方向づけられてきた社会福祉を「私たちの社会福祉」と捉え直し、「下から」どう変えることができるかを、従来の参加論を超えて議論している。援助ではなく当事者主体の取り組みや、もっとも問題を抱えている人びとが、参加するための条件整備の重要性を指摘した。またともすれば、古い地域共同や家族の連帯が強調されがちであるが、社会福祉は、基本的に「見知らぬ他人」との「大きな共同」の中で発達してきたものであり、その意味の再考を促した。

(いわた まさみ 日本女子大学名誉教授)